

保育の世界を豊かに 生きる子どもたち②

集まりを生きる子どものあり方

榎沢良彦

(大学教員)

園生活においては、子どもたちが保育者の前に集まり、保育者から伝達事項を聞く時間がある。このような時間は、子どもたちに人の話を聞く姿勢を身につけさせる時間として位置付けられるようである。人の話を聞く姿勢は個人の態度の問題であると考えられやすく、それ故、保育者は子ども一人ひとりの注意をいかにして自分に引き付けるかに努力するようである。果たして、人の話を聞くことは個人の態度だけの問題だろうか。今回は、集まりの状況を生きている子どもたちの様子をつぶさに見て、人の話を聞くことがどのようにして可能なのかを考えてみたい。以下に、ある幼稚園で終業式の開始を保育室で待っている子どもたちの様子をエピソードとして取り上げ、集まりにおける子どものあり方を考えてみる。

三歳のクラス。ピアノの前にK先生が立ち、子どもたちはその前に集まり、床に座って先生の話を聞く。隣同士でおしゃべりする子もいるが、子どもたちは先生の方を向いて座って

おり、全体としては先生の話を聞く姿勢である。私は子どもたちの背後に座っている。それに気付いたY子が私にほほ笑みかける。私はそれに笑みで応え、すぐにK先生の方に視線を戻す。すると、Y子もK先生の方に向き直る。子どもたちは決して黙って話を聞いているのではない。K先生は明るい表情で楽しい雰囲気を出しながら、退職される先生のことなど、いろいろなことを話す。子どもたちは時折にぎやかにながらも、K先生の話を聞く。

終業式を待つ間、保育室で保育者は子どもたちに伝達的な内容の話をしてきた。伝達事項は、一方から他方へと情報が確実に伝わるのが重要である。それ故、保育者は情報伝達という「目的遂行のあり方」をする。また、子どもたちも、同じ情報を誤りなく理解する（確実に情報を受け取る）という「目的遂行のあり方」をとることが求められる。すなわち、情報の「伝達―受け取り」においては、双方ともが目的遂行のあり方で応答し合うことが求められるのである。

では、エピソードでは、保育者と子どもたちのあり方はどうだろうか。確かに子どもたちは保育者の方を向き、話を聞いている。しかし、彼らは集中して聞いているわけではない。容易に注意をそらし、おしゃべりをしてしまう。子どもたちの「目的遂行のあり方」の中に、「遊ぶあり方」が入り込んでくるのである。では、子どもたちはそのまま戯れに陥り、保育者の話をまったく聞かなくなるかという点、そうでもない。保育者が注意することもあるが、全体として子どもたちが保育者の話を聞くことが維持されていくのである。従って、子どもたちは「目的遂行のあり方」と「遊ぶあり方」との間を揺れ動いていると考えられる。すな

わち、子どもたちは「両義的なあり方」をしているのである。

実は、保育者自身が子どもたちの両義的なあり方を許容するように応じている。K先生は、子どもたちがおしゃべりをして楽しそうにしている様子をとがめることはしない。むしろ、それに合わせて応じている。すなわち、和やかな雰囲気を維持しながら伝達事項を伝えているのである。従って、保育者自身も、「目的遂行のあり方」と「遊ぶあり方」という「両義的なあり方」をしているのである。

このように、集まりにおける子どもと保育者の生は、両者の両義的なあり方の絡み合いとして生起している。では、両義的なあり方において、子どもたちはいかに保育者の話を聞いているのだろうか。

子どもたちが両義的なあり方をしているということは、子どもたちの意識が遊びに傾いていく可能性が常にあることを意味する。確かに子どもたちが騒がしくなることもあるが、それでも何とか保育者の話を聞く姿勢が維持されている。それは保育者の働きかけのみによるのではない。そこには子どもたちと保育者の共同性が働いている。

子どもたちが保育者の話を聞いている時には、子どもたちは互いに相手の身体に影響を受けている。それにより、子どもたちに一定のあり方が生じ、維持される。すなわち、身体レベルでの共同性が子どもたち一人ひとりのあり方を支えているのである。

子どもたちが保育者の方を向いて座っていることにより、子どもたちの身体が指し示す意識の方向は同一になり得る。それ故、その場には全体として一つの意識の志向性が生じる。それは、個々の身体を包摂する全体的な身体が生じることを意味する。この一人ひとりの子

どもを超えて存在する包摂的な身体の発する志向性に、子どもたち一人ひとりの身体が同調し、導かれ、結果として保育者の話を聞く姿勢が生じるのである。

例えば、K先生の話聞いてる時の子どもたちは、孤立的に話を聞いているわけではない。彼らは隣同士で見合ったり、言葉を交わしたりもする。すなわち、子どもたちは自分と同じように保育者の話を聞いている仲間の身体存在を意識し、その志向性を感知しつつ、保育者の話を聞いているのである。こうして、子どもたちは仲間の身体から発する志向性を自分の身体の志向性にする事ができる。そうすることで、暗黙の内に同じ行動をすることができるのである。

同じことは子どもと保育者の間にも言える。例えば、エピソードの中で、私がK先生の方に視線を向けるやいなや、私にかかわっていた（私の志向性を全身で受けとめていた）Y子がK先生の方に向き直った。それは、Y子が遊ぶ方から聞くあり方（目的遂行のあり方）へと変わったことを意味する。そのような変化が生じたのは、私の身体の志向性をY子自身が感知し、自分自身のものとしたからである。すなわち、私とY子が身体を通して志向性を共有したからなのである。このように、身体により志向性が共有されていることは、私とY子の間に身体的な共同性が存在していることにほかならないのである。

以上のように、集まりにおいて子どもたちも保育者も身体的な共同性を有している。この共同性の下で聞く姿勢も生まれてくるのである。